第25回
日本癌病態治療研究会を主催して

第25回日本癌病態治療研究会 当番世話人
千葉大学 大学院医学研究院 先端応用外科 **松原 久裕**

平成28年６月８日（水）、９日（木）に千葉市の三井ガーデンホテル千葉にて、第25回日本癌病態治療研究会を開催いたしました。記念すべき第25回の研究会ということで、区切りとなるこれまでの本研究会の軌跡・癌治療への貢献と今後の発展に資する会にしたいと頑張って臨みました。記念すべき会を担当させていただき関係各位の先生方に心より御礼申し上げます。

✣✻✼✣✻✣✼✻✣

会の２年前にあたる平成26年６月、岐阜の杉山保幸先生が当番世話人として開催された研究会の際の理事会において竹之下誠一理事長より突然、今回の世話人の話があり、大変驚きながらも光栄なこととお引き受けいたしました。理事会にて指名を受け、皆さまよりご承認いただきました。今回は磯野可一先生、生越喬二先生が中心となり当研究会を発足させてから４半世紀という記念すべき研究会の当番世話人を仰せつかり、あらためて感謝申し上げます。開催に際しても竹之下誠一理事長をはじめ、理事、世話人の先生方に多大なるご協力をいただきありがとうございました。発足から４半世紀という記念すべき会のため、研究会の発起人の一人であり、当科の先々代の教授である磯野可一先生に発足当時の癌治療研究の状況、発足の経緯から今回までの発展の経過をテーマに講演をお願いしましたが、そんな後ろ向きのことでどうする、と指導を賜り、今後の本研究会の活動について理事長から話を伺った方がはるかに参加している会員のためになると助言を受け、今回この研究会としては初めて、理事長講演を企画し、竹之下理事長に依頼いたしましたところ快くお引き受けいただきました。当日の講演では竹之下理事長から本研究会の目的、存在意義の再確認、参加施設全体で他の学会では扱われにくいテーマを研究課題として取り上げまとめていくことの重要性、23年の歴史を持つ英文誌の意義とともに目指すべき方向性が明確に示されました。企画の意図したとおり、本研究会の今後の発展に大変有意義なものとなりました。

今回の研究会では主題の決定に際し、本研究会が目的としている癌の病態や治療法に関する研究に関し、癌自体の悪性度・行動様式と宿主に惹起する生体における反応の両者を考慮した治療法の確立を目指すという、癌治療において私が最も重要だと考えている観点から「癌と宿主の連環を斬る」というテーマといたしました。固形癌における癌治療の中心は手術であることは論を待ちません。周術期に種々の抗がん剤、放射線を利用した集学的治療が展開され、予後向上に寄与しております。また、これらの治療の効果においても生体側の反応は極めて重要であり、栄養状態、炎症などを含め生体の防御機構は極めて重要な役割を担っております。癌と宿主の関係を明らかにして治療を目指す、まさに本研究会の目的そのものだと

思います。

腫瘍免疫に関してはペプチドによるワクチン療法が期待され、これまでの抗がん剤の効果と異なり、局所における抗腫瘍効果ではなく生存に寄与する治療効果、可能性が徐々に明らかとなり、新たな予後の解析法も考えられるようになりました。悪性黒色腫に対する治療効果の報告から一挙に注目されるようになったImmune Checkpointの阻害剤は、これまでの化学療法剤が第１の波、分子標的薬が第２の波に引き続き、とてつもなく大きな第３の波ともいわれます。生体の反応ががん治療の中心となるという時代が到来し、本研究会が追求してきた課題が間違っていなかったことが明らかになってきた時代だと思います。

✣✻✼✣✻✣✼✻✣

今回のテーマに合わせ、特別講演として古関明彦理化学研究所グループディレクターに「iPS細胞技術によるNKT細胞再生とがん免疫治療」、教育講演として「宿主免疫機構を利用して癌を斬る－膵癌集学的治療を中心に－」と題したテーマで山上裕機和歌山大学教授に行っていただきました。いずれも今回のテーマに沿った最先端の話題が満載で大変勉強になりました。

特別演題では現在のがん治療の潮流を見据え、シンポジウムとして馬場秀夫熊本大学教授、池田徳彦東京医科大学教授に司会をお願いした「がん個別化治療の最前線」、特別発言は平川弘聖大阪市立大学医学部附属病院病院長にいただきました。もう１つは柴田昌彦埼玉医科大学国際医療センター教授、河野浩二福島県立医科大学教授に「免疫機構を利用した新しいがん治療」の司会をお願いしました。このシンポジウムでは松島綱治東京大学教授にお願いしました。また、パネルディスカッションとして加藤広行獨協医科大学教授、島田光生徳島大学教授に「癌の病態から考えた合理的な術式・器械選択」の司会をお願いし、癌治療の中心的役割を果たしている癌における外科治療の意義を討論していただきました。桑野博行群馬大学教授から貴重な特別発言をいただきました。Precision Medicineの中心的役割を果たすと考えられる「次世代シーケンサーがもたらすがん治療研究」の司会を藤也寸志九州がんセンターセンター長、三森功士九州大学別府病院病院長にお願いし、特別発言を森正樹大阪大学教授にお願いしました。ワークショップとして「早期肺癌に対する低侵襲治療」、「conversion手術の現状と未来」、「癌に対する分子標的の方向性」の３つのテーマを選び、小林国彦埼玉医科大学教授、吉野一郎千葉大学教授に肺癌を、國崎主税横浜市立大学市民総合医療センター教授、渡邉聡明東京大学教授にconversion手術を、大辻英吾京都府立医科大学教授、筆宝義隆千葉県がんセンター研究所部長に分子標的の司会をそれぞれお願いしました。いずれのセッションについても演者は司会の先生にお願いした上で、決定いたしました。すべてのセッションにおいて素晴らしい内容の発表が続き、多くの先生に参加いただき非常に濃い内容の討論が繰り広げられ、知識が深まった中、特別発言として貴重なまとめが述べられ今後の研究推進に役立つ、大変実りのある研究会となりました。一般演題も皆さまのご協力により74題もの多数の応募があり、会場、時間の都合からすべてポスターでの発表とさせていただきました。ポスター発表の時間は特別演題を行わず全員が一堂に会することができる様に設定し、１日目はその直後にイブニングセミナーが控えているためソフトドリンクのみにしましたが、２日目はワインなどを楽しみながら忌憚ない討論が展開されました。

前回の研究会では世話人の加藤広行先生が日光という世界遺産の地で主催され、自然も満載の素晴らしい環境だった状況とまったく異なり、今回は千葉市内の街中という観光資源に乏しい地で開催したため、なるべく会場内で有意義な時間を使っていただこうとセミナーもランチョンセミナー

全員懇親会終了後　T.J.P.P.A.L の皆さんと一緒に

を 2 件、イブニングセミナー、モーニングセミナーと欲張って企画しました。幸田圭史帝京大学千葉医療センター教授から「直腸癌治療の最近の動向」、岡住慎一東邦大学佐倉医療センター教授から「上部消化管がんの質的病態画像診断と治療の今後について」、杉尾賢二大分大学教授から「免疫療法 Up to date」、大腸外科の若手のリーダーである大塚幸久、松田明久両先生から「進行大腸がんに対する合併症軽減のための戦略」の 4 題の今後の診療に役立つ貴重な講演をいただきました。

会長招宴では当科の秘書の佐野友紀さんと友人の方々による邦楽の生演奏を披露してもらいました。出身の東京芸術大学の仲間たちの演奏でその迫力と素晴らしさに圧倒され、感動を与えてくれました。全員懇親会ではマリンバを中心とした十鳥勉氏が率いる T.J.P.P.A.L によるワンダードラム・パフォーマンスで驚異的な技術による連弾、リズム、楽しいパフォーマンスを満喫し、会務や学問から少しの間離れ、refresh いたしました。

参加された多くの先生方より、お世辞もあるとは思いますが非常に勉強になった素晴らしい研究会だったとお褒めの言葉もいただきました。

✣ ✻ ✼ ✣ ✻ ✣ ✼ ✻ ✣

当科の宮内英聡准教授を中心に医局員が日常業務の忙しい中、協力して築いてきた手作りの研究会であり、不備も多々ありましたが、皆さまのご支援、ご協力により有意義な研究会になったと思います。ご支援本当にありがとうございました。また、今回の開催にあたっては日本コンベンションサービス株式会社の岡本麻結さんを中心とした皆さまに大変お世話になりました。毎月、大学まで足を運んでいただき、綿密な打ち合わせを行い当日までこぎつけました。大変感謝しております。さらに多くの企業からも後援いただき、無事開催することができました。この場を借りて、関係各位に心より感謝申し上げます。

今後の本研究会の新たな出発の会として位置づけられるような研究会となるよう祈念して、本研究会の益々の発展に少しでも力になれるよう頑張っていきたいと考えております。